

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：34517

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26330391

研究課題名(和文) 日本食とアニメのグローバルな受容に関する研究

研究課題名(英文) Study of the dynamics of Global Receptiveness of Japanese Food and Anime

研究代表者

大森 いさみ (Omori, Isami)

武庫川女子大学・生活環境学部・准教授

研究者番号：80368505

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は近年のグローバルな日本食の人気とアニメの受容に関する動態について、世界各地でのフィールド調査を行うことによって捉えようとするものである。調査の結果、世界各地の人たちの日本食受容には、同一地域においても、アニメ視聴の経験によって日本食受容のありかたが異なることが示された。さらに、それぞれの日本食に対するイメージ形成にはそれぞれの地域の地元意識が大きな役割をはたしていることが捉えられた。一方、海外における日本食人気は、日本国内での日本食への興味喚起となった。なかでも、和食のユネスコ無形文化遺産への登録は、多くのメディアが日本食についてのこれまでにない数の記事等を掲載する契機となった。

研究成果の概要(英文)：This study examined the recent trend of global receptiveness of Japanese food and Anime by conducting multi-site field work. The results indicate their childhood Japanese Anime view experiences closely connect to their taste preference for Japanese food. Besides, the results determined that many of interviewees at all of sites had limited knowledge of Japanese food, that their images of Japanese food played a role in adding meanings to the locality of each site. Meanwhile, popularity of Japanese food in other countries drew Japanese people's attention to Japanese food like never before. In particular, the UNESCO inscription triggered a rapid increase in the number of media articles related to Japanese food in Japan. This is because the unique characteristics of Japanese food were enhanced by the contrast with 'world' cuisines created by the UNESCO registration. In addition, the UNESCO recognition linked words associated with time and place to Japanese food.

研究分野：人文社会情報学

キーワード：日本食 メディア アニメ

## 1. 研究開始当初の背景

日本の食についての研究は、調理学、食品学、文化人類学、民俗学と多岐にわたる分野において蓄積がある。しかし、その多くが日本をフィールドにした、もしくは越境した日本をフィールドにした研究であり、日本食の世界各地での人気が高まる一方で、その受容の動態について、マルチサイトな調査に基づき統合的に捉えた研究は数少なかった。

食文化の受容や変容についてのメディアをフィールドにした調査は教育学の分野において、食習慣の形成への影響など数多く論じられてきた。しかし、メディアのデジタル化によるグローバルなネットワーク化を背景にしたポップカルチャーとしての日本食受容を、アニメやメディアとの相関という視点から考察したものも限定的であった。

## 2. 研究の目的

日本食の世界的な人気は、従来のディアスポラ的な伝播とは異なる現象なのではないか。つまり、世界にあふれる日本食は、グローバル化とともに現代的な現象を照射する研究対象ではないかと考えた。そこで、世界各地でみられる日本食受容を、感覚としての味の共有という視点からその諸相を浮き彫りにすることを目指した。具体的には、インドネシア、メキシコ、ポーランドなど社会変化の著しい地域におけるアニメ視聴と日本食受容の動態を捉え、メディア上で共有されたイメージが、現実のものとしてローカライズする過程を分析し、メディア接触と日本食受容との相関を捉えることを目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) インドネシア(ジャカルタ、バンドン)、メキシコ(プエブラ)、ポーランド(ワルシャワ)、ラオス(ヴィエンチャン)、スペイン(バルセロナ、サンセバスチャン)の都市において大学生とその家族を対象に、以下のフィールド調査を実施した。大学生を成員にもつ家族の日常生活における食事行動およびメディア接触の参与観察。大学生を対象としたアニメ、日本食、メディア接触に関する聞き取り調査。の参与観察では全食事の写真記録を行った。の大学生を対象とした聞き取り調査では日本のイメージ、日本食経験、日本アニメ経験、外食行動、ローカルフードについて、という5項目についての半構造化インタビューを実施した。これらのインタビューで頻出したキーワードや彼らの用いる特徴的な言葉やコンテクストに注目し、分析を行った。

(2) 調査をすすめるなかで、日本国内での日本食イメージの形成とメディアの相関についても着目し、新聞やテレビといったマスメディアにおける日本食記事の増減やそれらの記事にとりあげられた語彙の変容、記事の内容分類とその変化についても調査を行ない、海外における日本食イメージとの違いについても考察した。

2013年の和食のユネスコ無形文化遺産登録後の3週間については、全国紙3紙(朝日新聞、毎日新聞、読売新聞)及びNHKの番組表(番組紹介含む)について内容分析を行った。それとともに、2000年から2016年までの17年間の全国紙3紙(朝日新聞、毎日新聞、読売新聞)に掲載された全記事のうち、日本料理、日本食、和食のいずれかの語を含む記事を対象にそれらの記事に含まれる語彙についての統計的分析を行った。

(3) 世界的な食のトレンドに大きな影響力を持ち、日本食受容についても大きな役割を話したと考えられるフランス人の高級レストランの料理人の日本食受容について、フランスにおける日本食人気の黎明期であった2000年代前半に実施された、フランス人の、当時発売されていたミシュランガイドブックに掲載されていた高級レストランの料理人(オーナーシェフ)7名を対象に実施した聞き取りの記録を用い、彼らの語りの分析を行った。

## 4. 研究成果

(1) インドネシア、メキシコ、ポーランド、ラオス、スペインで行った大学生を対象としたフィールド調査の結果、すべての地域の学生たちの日本食受容には、幼年期におけるアニメの視聴経験が大きく影響していることが明らかになった。同一地域においても、アニメ視聴の経験によって日本食受容のありかたが異なり、子供の視聴経験が家族の日本食受容の態度にも影響を及ぼしていることが示された。調査した各都市における日本食受容は、いずれの都市においても、まずは外食行動のなかで行われ、その際に子供(学生)が先導して日本食を選択し、それに親が追従するというパターンが多くみられ、親に勧められて日本食受容を初経験するというパターンは多くない。そして、子供たちの日本食受容の大きな動機づけとなっているのがアニメ視聴によるバーチャルな日本食経験であることが捉えられた。さらに、それぞれの日本食に対するイメージ形成にはそれぞれの地域の地元意識が大きな役割をはたしていることが考察された。

それぞれの都市における日本食受容の動態は異なったものであったが、各地域で日本食を積極的に摂食している学生たちはいず

れも「他者の味」としてではなく「私の味」として日本食受容をしていることが、学生たちの語りから示された。マスメディアからインターネットを介したユニバーサルネットワークへのメディア接触の移行は、情報共有の在り方を、地理的な空間共有から嗜好共有へと変化させ、より個別化させている。日本食受容についても、その情報受容の個別化の動態はユニバーサルネットワークへのメディア接触の移行に強く性格づけられ、そこにアニメ視聴との強い相関が考察された。

(2) 海外における日本食人気は、日本国内での日本食への興味喚起となった。なかでも、和食のユネスコ無形文化遺産への登録は、多くのメディアが日本食についてのこれまでにない数の記事等を掲載する契機となった。日本食についての記事は急増する一方で、それらの記事の内容に多様性はみられず、日本食の独自性や歴史、場所とのつながりを強調する言説が日本のマスメディア上で繰り返し流布されたことが考察された。

また2000年から2016年までの全国紙の日本食に関する記事における語彙を調査した結果、「文化」「海外」「地域」「伝統」などの言葉が、2013年のユネスコ無形文化遺産登録を機に日本食と関連づけられて用いられる傾向がみられることが明らかになった。そして、場所や時間に関連する語彙が数多く用いられようになったことが示された。

(3) フランスにおける日本食人気を先導した高級レストランの料理人たちの日本食受容は、旧来の古典的なフランス料理とは一線を画することをめざし、自らの料理がマルチカルチャーな寛容性を有することを体現する自己表現としての受容であったことが明らかになった。その受容において、日本らしさとは彼らのもつ日本というイメージに準拠するものであり、日本という国家や日本国民が考える日本に必ずしも参照される必要はないとされる。つまり、正統性はさほど重視されておらず、日本食の受容の動機づけは、日本らしさの受容ではなく、「私らしさ」の表現手段としての受容であったことが示された。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6件)

大森いさみ、日本食受容のグローバルな動態 プエブラとワルシャワの大学生を事例に、奈良女子大学大学院人間文化研究科年報、30号、2014、pp.69-80

大森いさみ、「私の味」としての日本食の受容 プエブラとジャカルタとワルシャワの大学生の事例より、生活学論叢、査読有、27号、pp3-15

大森いさみ、2000年代後半のフランスにおける日本食受容の諸相 高級レストラン料理人を事例に、生活文化史、査読有、69号、2016、pp.21-32

大森いさみ、The Redefinition of Washoku as National Cuisine: Food Politics and National Identity in Japan、査読有、International Journal of Social Science and History 7(12)、2017、pp.729-734

ISSN: 2010-3646; DOI: 10.18178/IJSSH

佐野敏行、ラオス大学生の日本食受容 アニメ経験と伝統性意識の関連から、家政学研究(奈良)、2018、Vol.64(2)、pp.35-42

大森いさみ、The Impact of UNESCO Heritage Status on Japanese Food Discourse in Japanese Newspapers、査読有、Food Studies: An Interdisciplinary Journal、2018.03 (Accepted with Revisions)

[学会発表](計 3 件)

大森いさみ、What is Japanese Cuisine: The Changing Vocabulary of Japanese Cuisine in Japanese Newspapers、査読有、6th International Food Studies Conference、2016.

大森いさみ、The Redefinition of Washoku as National Cuisine: Food Politics and National Identity in Japan、7<sup>th</sup> International Conference on Humanities, Society and Culture、2017

大森いさみ、What the Impact UNESCO Heritage Status Has Had on Japanese Cuisine Discourse in Japan、査読有、The International Conference, Food and Society: Taste, Culture, Education & Communication、2017

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

[その他]

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大森 いさみ (OMORI, Isami)  
武庫川女子大学・生活環境学部情報メディア学科・准教授  
研究者番号：80368505

(2) 研究分担者

佐野敏行 (SANO, Toshiyuki)  
奈良女子大学・大学院人間文化研究科・教授  
研究者番号：20196299

(3) 連携研究者 なし  
( )

(4) 研究協力者 なし  
( )